余暇活動を通じて自分らしさを発揮していく特別支援学校高等部の実践報告

Practical Report of the Senior High School Course of the School for Special Needs that Demonstrates Personality through Leisure Activities

村川　恵　MURAKAWA Megumi（教諭　附属特別支援学校）
三木　裕和　MIKI Hirokazu（教授　発達科学講座）

キーワード：知的障害 Intellectual Disability、余暇活動 Leisure Activities、青年期 Adolescence

はじめに

平成１８（２００６）年１２月に「障害者の権利に関する条約」が国連で採択されたことにより、国内の教育・福祉に関わる法整備や制度変更が進められてきた。そして、平成２６（２０１４）年1月に「障害者の権利に関する条約」の批准がなされた。平成２８（２０１６）年４月には「障害者差別解消法」が施行され、障害による差別の禁止、合理的配慮提供の義務が（努力義務）明文化された。そのような国の動きの中で、平成２９（２０１７）年４月には「障害者の生涯を通じた多様な学習活動の充実について（通知）」が文部科学省生涯学習政策局より通知された。推進に向けて同局に障害者学習支援推進室が開設され、障害者の生涯学習を推進していくこととなっているが、この取組の推進は、特別支援学校卒業後に社会教育の範疇での推進を中核とする方向で意図されている。

さて、特別支援学校学習指導要領において、知的障害者の学習特性として、「学習内容を習得するのに健常児よりも時間と経験の積み上げが必要」と明示されている。生涯学習の推進を考えた時、障害の程度によっては、学校卒業後に新たな大人集団の中に入って生涯学習に取り組むことに対して、ハードルの高さを感じる障害児やその保護者が多いのではないかと危惧している。

前述の通知には、「卒業後も含めたその一生を通じて、自らの可能性を追求できる環境を整え、地域の一員として豊かな人生を送ることができるようにすることが重要」であると記載されており、あわせて「ライフステージ全体に着目して、多様な学習活動を支援する取組」の充実が学校教育期に求められている。

本研究では学校教育から生涯学習へスムースに移行できるよう、生徒一人一人が自分らしさを発揮でき、学習で得た力（知識・技能）や自信が将来の生活を豊かにする手掛かりとなるような教育活動を明らかにしたい。それにより障害者の生涯を通じた生き甲斐づくり、地域との繋がりづくりの一助になると考える。

１　研究の目的・方法

本研究では学校教育から生涯学習へと知的障害者が円滑に移行できるよう、特別支援学校高等部で効果的と考えられる教育内容及び教育課程への位置づけを明らかにすることを目的とした。

障害者の生涯学習の推進は「働く力」「生活する力」だけでなく「楽しむ力」を伸ばしていくことで、社会の中で自分らしく生きていく基盤となると考えた。鳥取大学附属特別支援学校では高等部本科に平成８年度より「余暇活動」を教育課程の中に組み入れている。「余暇活動」の授業を中心として生徒の「楽しむ力の充実」「自分らしさの発揮」を見取りながら研究を進める。

研究方法は鳥取大学附属特別支援学校高等部本科で事例研究を通して、事例対象生徒の学習での様子、心の動きなどをエピソード検討によって丁寧に読み取り、青年期の生徒にとって学習で学んだことがどのように生活を豊かにしているのかを検討していく。それにより、より良い題材、教育内容の有効性を検証していった。

２　青年期の余暇活動について

（１）ライフステージ「青年期」

特別支援学校高等部のライフステージは青年期にあたる。高校生になると、教師や保護者などの大人からの称賛では満足できなくなり、ともに活動する仲間と支え合い、喜びを共有することに大きな充実感を覚えるようになる。また、これまでの積み重ねた経験によって、自分の好きなこと、得意なことが分かり始める。「友だちがやるから。」という理由ではなく「自分はこれがしたいから。」と、自分の道を選ぶことができるようになる。自分で自分のいごこちの良い居場所をつくることができるようになる。仲間の中で自己発揮しながら成長していくことのできる時期である。

しかし、その反面、自己と向き合うことにより、内面が大きく揺れ動く時期でもある。自分の「できなさ」に向き合えず逃避や抵抗を示したり、自信のなさから親や教師に判断をゆだねたりする姿も見られる。進路学習の時のアンケートで「自分の卒業後の進路を決めるのは誰ですか？」という質問に「保護者」と回答する生徒も多い。

そのような時に学校教育の中で必要なものは、単なる成功体験や享楽的な楽しみではなく、生徒が「だんだん良くなっていく自分」「大人になっていく自分」を感じられる経験だと考える。「自分は何がしたいのか。どうなりたいのか。」と悩み、自分で決めて取り組むこと、上達していく喜び（もしくは上手にできない葛藤）を感じることは、「指示されたことができた。」達成感とは違う。結果がどうあれ「前回よりもよくなってきた。」「手応えがあった。」「要領がわかってきた。」と自分の変化を感じられる経験が必要だと思われる。

そこで青年期にふさわしい余暇活動として、同じような趣味嗜好を持った仲間の中で多様な価値観や可能性に触れられる活動を検討実施してきた。「大人の自分」を感じられるよう、専門家を招いて指導をうけたり、本格的な活動を体験できるよう道具や教材を大学などから借り受けたりした。

活動を通して、時には自分と向き合い葛藤しながら、自分らしさを発揮して成長することができ、一人一人が自分らしく生きるための生涯学習の実現につなげたい。

（２）余暇活動とは

フランスの余暇学者Ｊ．デュマズディエ（１９６２）「余暇文明へ向かって」によると，「余暇」[1]には３つの機能があるとされる。

「休息」…疲労を回復させるもの。のんびり休む。

「気晴らし」…退屈から救出するもの。単調な労働から補充的代償的経験、日常生活からの逃避。旅行、スポーツ、映画や小説への自己投影など。

「自己開発」…自分の選んだ学習や社会参加を通して，知識や能力が自由に伸びる機会となるもの。自分が選んだ自由な活動を通じて自己実現の道を切り開くもの。

「こうした仕事（余暇）から得られる利益（金銭だけではない）はすべて自分のものである。そして自分は自分の「主人」だという感じを味わうのである。」[1]「それが美しいか見苦しいか、役に立つか立たないかは一応別にして、『自分の手で考えること』、反省を含むもの（が大切である）。」[1]

また日本の生活学研究者である今和次郎（１９５１）[2]によると生活の実態の段階には三つの段階があると考えられている。

第三段階…労働+休養と栄養

第二段階…労働+休養と栄養+慰楽

第三段階…労働+休養と栄養+慰楽+教養

これまでも「余暇」という言葉が「暇つぶし」「休日にする活動」「遊び」と狭義の活動として捉えられがちであり、教員間でも「卒業してから、このようなことをするのか。」「家でできることがよいのではないか。」「遊びに時間を取って、普通の教科学習はどうなっているのか。」などと問われたことがあった。本校高等部本科が教育内容として捉える「余暇」は，青年期の生徒たちの「自己開発」の機会となり，その人の人生を豊かにするような多様な学びの場として学部全体で共通理解をした。

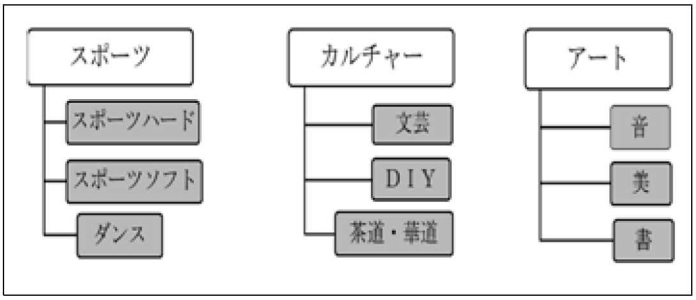
また、そのような観点で行う余暇活動の背景には、独自の「文化」がある。スポーツのルール、道具の効果的な扱い方、作品や言葉、音のもつ美しさ、洗練されたマナーなどの文化を楽しみ、味わった経験が卒業後の生活を支える一助となってほしい。そのような願いをもって実践を行った。

（３）「余暇活動」の教育課程上の位置づけ

高等部本科では令和元年度までの３年間をかけて「余暇活動」を教育課程上で整理する研究を行った。

研究に取り掛かる平成２９年度までは、「余暇」に関する活動は教科と学校設定教科が混在していた。そのため、教員内でも活動のねらい、内容の捉えが違っていた。平成３０年度には「余暇の拡がり」という目的によりせまるために、「余暇活動」に関する学習活動を学校設定教科として教育課程上の位置づけを明確にし、教育内容や活動グループの再構成を行った。

青年期のニーズに相応しい余暇として「スポーツ（運動）」「カルチャー（文化的な活動）」「アート（芸術的な活動）」の３分野を設定した。生徒の実態に応じて各分野に３グループを設定した。令和元年度は図―１のようなグループが設定された。生徒は各分野で１グループを選択する。余暇に関する活動を合計３つ選択し、１年間活動する。活動前アンケートでは第２希望まで選択するが、「自分は何をやりたいのか、何が楽しめるのか」と自分に向き合い、自分で決めてほしい、という教師の願いから、多少グループの人数にばらつきがあっても、本人の第一希望になるようにした。



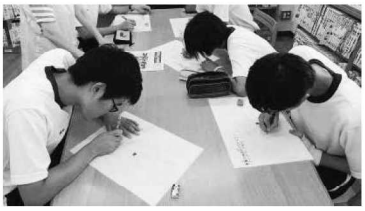
図－１　学校設定教科の活動グループ

スポーツ

スポーツハード

スポーツソフト

ダンス



カルチャー

文芸

ＤＩＹ

茶道・華道

アート

音

書

美

３　事例研究

平成２８年度（２０１６）から令和元年度（２０１９）までの４年間で２名の生徒を事例対象として、学習での様子、心の動きなどを学部研究でのエピソード検討によって丁寧に読み取り、学習で学んだことがどのように生活の豊かさにつながっているか、よりより教育内容は何かを検討していった。

（１）　生徒Ａ（平成２８年度～３０年度事例対象、男子）

Ａは地域の中学校から本校高等部に入学した生徒である。

軽度の知的障害で手先が器用な生徒だが、未経験のことやできないことがあると固まって動けなくなったり、参加せずに集団から離れて座り込んだりすることが多かった。指示されたことはできるが、自分で選んだり決めたりすることができなかった。「無理。」「疲れた。」「面倒くさい。」と言うことが多く、自分から「～したい。」という意思表示を示すことはほとんどなかった。

高１で職場体験を行った。昼食時にパン屋でパンを選ぶことができず、何も食べなかった。職場見学では固まってしまい、机に突っ伏して終わった。同じように、教室で夕方まで固まったままでおり、保護者に迎えに来てもらうことも何度かあった。

そのような中で工芸班での作業学習は好きな活動で意欲的に参加できた。非常勤講師の先生の専門的知識や仕事をする姿に憧れを持っていることや自分の手先の器用さを発揮できること、製品が売れる喜びが味わえることなどがＡを活動に向かわせたのだと思われる。

Ａはその後、作業学習や余暇活動などの小集団での学習には意欲的に参加し始めるようになった。これは集団が小さいことと、「自分で選択して学ぶ」学習であることが共通している。Ａはものづくりをする活動や自分のペースでできる活動を選択しており、同じような趣味嗜好を持った仲間たちは穏やかで物静かな生徒が多く、居心地がよかったのかもしれない。作業学習の工芸班は３年間続けて選択した。３年間のうちに陶芸作品を作る腕も上がり、周囲から認められることで自己肯定感も高まり、自分のアイデアや意見を言うようになっていった。余暇活動でも自分が納得できるまで作品づくりに励んでいった。

３年時には、スポーツは「スポーツハード（当時の名称は「球技」）」、カルチャーは「ＤＩＹ」、アートは「美（当時の名称は「美術」）」を選択した。

余暇活動を選択する時「ＤＩＹか茶道・華道にするかちょっと悩んだ。」というエピソードがあったが、１年次は「選べなくて固まる」だったのが「やりたいことが２つあって迷う」ようになったのは、３年間で経験を積み重ねた

こと、選んだものを自分のペースで進められる「間」があったことがよかったと思われる。

またスポーツでの琴の浦特別高等支援学校との交流大会にも参加できた。交流会までに教師や友だちと「Aの膝が最後までもつかな？」「大丈夫、シュートは〇〇君が決めるから。」などの冗談を言い合ったり、当日使用するシューズを気にしたりするエピソードがあった。仲間と活動する楽しさ、自分はチームに必要な戦力だという自覚が、未経験のことへの不安よりも大きくなったのだと思われた。

ＤＩＹでは、仲間の製作をさりげなく手伝う、美術で自分のアイデアをもとにデザイン画を何枚も描くすがたがみられるようになった。

Aは「人と少しずつでもいいから話せるようになりたい。人と話をしたり、人に話しかけられたりしても答えられないから少しでもしゃべれるようになりたい。」と専攻科へ進学している。

その当時、「青年期の願いにこたえらえるような活動を」と、専門家による指導をうけて本格的な制作活動をしたり、それぞれの活動での「仲間と活動することのよさ、楽しさ」を話し合ったりして、教育内容の改善を行っていった。

書道パフォーマンスの装飾担当となり、アイデアをどんどんだしていく。

（２）生徒Ｂ（令和元年度事例対象、男子）

Ｂは地域の小学校から本校中学部に入学した生徒である。

障害特性である衝動性、多動性から思ったことはすぐに行動に移してしまい、自分の思いが伝わらないと投げやりな態度になったりする。反面、自己肯定感が低く自信を持ちにくいという内面を持っている。

カルチャーで「茶道・華道」を２年連続選択した。「茶道・華道」では、試行錯誤しながらじっくりと取り組む姿が増え、２年生になると見本を見せたり片づけを率先したりするようになった。自分が好きなことを何とか仲間や教師に伝えようとする姿が見られ始めた。「どうせ」などの投げやりな言葉が減り、「（茶道は）得意だけーなー、担任の先生にも点ててあげんとなー。」などの前向きな発言が見られ始めた。

スポーツでは「スポーツハード」を２年連続で選択した。２年生のエピソードとして「（バスケットの）パスができるようになった。シュートが変わってきた。」というものがある。１年時パスが上手くできなかった。どうすればいいのか分からないまま、「どうせやってもできんし。」と教師に促されてやっと練習していた。２年生になって、仲間と昼休憩に練習する姿が見られるようになり、向上心が出始めた。「できる・できない」という基準は自信のなさとともに依然としてあるが、「楽しめるかどうか」も価値あることだと感じ始めている様子だった。

「花の顔を見て」と指導され、より美しくなるよう活け方を工夫する。

（３）どの授業においても大切にしたい視点の共有

４年間２名の事例対象生徒の活動の様子、内面の変化をエピソード記録をもとに高等部職員で検討を重ね、どの授業においても大切にしたい視点を３つにまとめた。

大切にしたい３つの視点

①　「本物・本格的なものとの出会い」

導いてくれる専門家や「本物」と出会うこと　で、「大人の自分」を感じられる授業であること。

本格的なピザ窯製作に挑戦

②　「仲間と楽しむ」

青年期の憧れ、葛藤など、生徒が「今」「自分」と向き合う時、支えとなる仲間を意識できるような授業。

③　「楽しむ力の充実」

余暇活動を「将来の自分を支える活動」と捉え、より内面の成長を促す教育内容。

書道パフォーマンス当日の緊張感を皆で共有。最後の一筆を祈るような気持ちで見守る生徒たち。

４　実践記録

（１）　３つの視点に基づいた実践の積み重ね①「本物・本格的なものとの出会い」

令和元年度は科研費を利用してよりダイナミックな活動を展開した。

カルチャー「ＤＩＹ」グループではスタートして３年目になる。１年目は鳥取大学の土井康作先生より工具をお借りしたりアドバイスを頂いたりして、校内に置くベンチを一人１台製作した。２年目は聾学校の技能主事中尾仁志先生を非常勤講師として、専門的な指導を頂きながら体育館上部に設置する校名ボードを制作した。授業者から見ると、非常勤講師の説明や指導は、生徒には難しく厳しいように感じたが、生徒は「（非常勤講師の）先生が言ってたのは、こういうことですか？」と、自分で思考し実践し、「たしかに切り口がきれいだ。」と実感を伴って学んでいった。教師は「知的障害があるから、説明は簡単に分かりやすい言葉がいい。」と考えがちである。しかし、生徒が興味を持ち、思考をくぐらせ、新たな技術を習得していく過程を見ていくと、「内面（気持ち）が動く」ことの大切さを改めて思い知らされた。また、非常勤講師に「よし！」と一言ほめてもらったことが支えとなり生徒Ａも、周りの状況を見て自分なりの「間」と取りながら参加した。

３年目には、科研費を使用してピザ窯作りに挑戦した。非常勤講師の山田信明先生と大学生ボランティアを迎え、セメント練り、薪割りなど新しいことへ挑戦した。そこで体力に自信のない生徒が丁寧にセメントを均す姿を褒められたり、自己肯定感が低い生徒が「君は上手だから、一人で任せる。」と言われたりすることで、生き生きと活動する姿が見られた。教師や親とは違った近い立場の憧れの人＝「ななめの存在」の重要さを感じる場面だった。また、自分の自信のなさを見せまいと乱暴な態度や言葉を使っていた生徒が、１年間活動するうちに「あれ（レンガをカットするディスグラインダーという道具を使う作業）、恐くて苦手なんだが。道具洗ってるのが安心するだが。」と、自分と向き合っている姿も見られるようになった。作業学習とは違い、「自分にできそうなところから自分のペースで始めればいい」という活動は周りの評価を気にする生徒にとって大切な時間だと思われる。また、１年間かけて、暑さ寒さにも耐えて製作を続けるうちに、自分の得意なことややりたいことを見つけ出して、自分で自分の居場所を作り出し、居心地よく環境を整えていく姿が見られた。

しかし、残念なことに２月末に完成した直後、国の小中高、特別支援学校が一斉休校となったため、令和元年度に稼働することはなかった。大学生ボランティアも卒業、進学、就職などで最後のあいさつを言う間もなく、お別れとなった。

真冬のセメント練り（左）。２月末にやっと完成（右）。しかし、完成直後の全国休校措置により、稼働せずに終わり、大学生とも急なお別れとなった。

アートの「書」では、鳥取大学の住川英明先生に指導を頂いたり、鳥取大学書道部学生が授業ボランティアに参加したりしている。科研費で書道パフォーマンス用の筆や和紙などを購入し、年度末に合同アートとして書道パフォーマンスを披露している。「書」グループは文字を、「美」グループは装飾を、「音」グループはダンスや歌でのパフォーマンスを行った。そのほかに「文芸」グループは「ビブリオバトル」「百人一首」、「茶道・華道」グループは季節に合せて野点や初釜を行った。大学教員の指導、大学生ボランティアなど大学附属の強みを生かすことでより本格的な活動を展開させた。それぞれの活動の土台となる「文化」を味わい、教養を身に着けることに喜びを感じている姿は、卒業後の生涯学習の場へつながっていくものと思われる。

（２）　３つの視点に基づいた実践の積み重ね②「仲間と楽しむ」

活動内容によって生徒によって「仲間」の存在は違う。先述の生徒Ａにとっては、干渉しすぎず、それぞれが自分のペースで活動しながらも、お互いの良さを感じあえるような関係の中で成長していった。苦手なものや見通しがつかないものは、仲間の様子をみながら自分の気持ちを整えていく姿があった。Ａが参加しなくても責めず、参加する時はともに活動するような大らかな集団の中で成長し、他校との交流にも参加できた。また、他の活動でも自分の意見を言うことができるようになっていった。成長の土台となったのが、一つは様々な活動を通して自信がついたことがある。もう一つは仲間の活動する姿を見ながら、彼が「できる・できない」「良い・悪い」「早い・遅い」などの二分的評価から「前回よりはよくなった」「〇〇さんの

作品は、個性的で自分は作れない。」など、多様な価値観に触れたことがきっかけだと思われる。

作業学習では自分よりも障害が重い生徒が働く姿を見て、「～さんは、何もできないと思っていたけど、仕事がとても丁寧だ。」と、その人の良さを見つける。そして、

「自分は～ができる。手伝える。」と自分の良さにも気づく。Aは他者理解を通して、自己理解を深めていった。

Bにとっての仲間は、２年生になり、得意の茶道・華道で「知らない仲間に教えてあげないと。」「大丈夫だろうか。」と気遣えるようになっていったことが大きい。特性である衝動性や多動性から突発的な動きをして注意され落ち込むことが多かったBが、落ち着いて周りを見て活動でき始めた。仲間とバスケットを楽しめるようになってから、ボールをもらったらすぐシュートをしていたのが、パスができるようになった。自己否定的な言葉が多かったが「得意だけーな。」「好きだけー。」と語る姿が見られた。

それぞれの事例生徒にとって自分で選んだことに仲間とともに打ち込む活動は大きな価値があったと思われる。

（３）　３つの視点に基づいた実践の積み重ね③「楽しむ力の充実」

余暇活動を３分野設定したのは、いろいろな経験を積み重ねてほしい、という教師の願いがあった。知的障害のある生徒たちは、学習で得た経験を他の活動に般化しづらい傾向がある。やったことしか選べない、未知のものへの不安が強い生徒が多い。そのため、余暇活動を３分野設定し、いろいろなジャンルの経験を学生時代に積み重ねてほしいと願っている。様々な人との関わりや学ぶ場が広がることで、自分の役割を果たす喜びを感じたり、個性を生かしたりしながら自分らしい生き方を実現する礎となっていくと考える。カルチャーで３年間ＤＩＹグループを選択した生徒が、３年生になって「セメント練りが終わらなくて、残業していたら楽しくて、働くのも楽しいと思った。」と感想を述べたことがあった。余暇活動を通して、自分の将来へ明るい見通しを持つことができたようだ。

（４）学習活動に参加した大学生ボランティアの変容

学校設定教科では、専門家（大学教員、非常勤講師）の指導の他に、多くの大学生ボランティアの協力を仰いだ。「スポーツ」では、一緒に陸上をしたり、鳥取大学ダンス部と踊ったり、「アート」の書グループでは鳥取大学書道部学生にアドバイスをしてもらったり、DIYグループでは工学部など経験のある学生と活動したりするなど、年間を通して多くの大学生が活動に加わった。生徒にとって大学生は、教師や専門家よりも近い憧れの存在である。一緒に活動することで、自分もまた大人に近づいている存在であると意識できるようになっていった。大学生と対等に関わることができる自分に誇りを持つ姿も見られた。また、当初は予期していなかったが、大学生側にも変化が見られるようになった。年度最後に協力してくれた大学生に感想をとった。以下は抜粋である。

○鳥取大学書道部　３年生（書グループボランティア）

「私は今まで特別支援学校に行ったことがなかったので、どんなことをしているのかや学校の雰囲気など全然知りませんでした。（中略）ボランティアを行うまでは自分が役に立てるのか不安でしたが、「ここが良いよ。」とか「この字好きだな。」と私たちが言ったことを生徒の皆さんが喜んでくれているのをしって私も嬉しかったです。○○さんが名前をおぼえていてくれたり、△△さんが消費税に関する言葉を書いた時、授業で習ったことだと教えてくれたりなど、小さいことではありますが、そういったことがすごく嬉しかったです。書道パフォーマンスの発表でも□□さんの桶を引く動きが一番良くて、アドバイスを意識してくれて嬉しいと思いました。（中略）

今回のボランティアを通して私自身も成長することができました。私の母は障害のある人が働くことを支援する仕事をしています。今までは大変なのになんで母がその仕事を選んだのか分かりませんでした。しかし、今回の経験を通して母がその仕事を選んだ気持ちが分かるようになりました。自分が知らないことを学ぶ大切さを改めて実感することができました。」

○鳥取大学地域学部３年生　（ＤＩＹグループボランティア）

「完成まで見届けられなかったのが残念ですが（完成間際にコロナ感染予防のため休校となったため）ピザ窯とともに築かれてきた皆さんとの思い出は胸の中に残っています。

約半年間、素敵な場を提供してくださりありがとうございました。先日、静岡で障害者の余暇活動を支援している団体の話を聞く機会がありました。やはり余暇活動は、生活の中で最もかけがえのない営みだと感じています。言い過ぎですが、ピザ窯作りを通して「生きること」について少し考えることができたと思います。」

○鳥取大学地域学部４年生（ＤＩＹグループボランティア）

「４年生前期から活動には参加し、木を切断する作業やレンガを切る作業にみなさんが果敢に挑戦する姿を今でも覚えています。（中略）日に日に姿が変わっていくピザ窯を見るたびに、とてもわくわくした気持ちになりました。きっと生徒の皆さんも少なからずそうした気持ちになる場面を経験したのではないかなと思います。一年を通して一つの活動に取り組む経験、余暇活動の幅を広げるといった魅力の他に、もしかしたら自分の成長と活動の進捗を重ね合わせて捉えることができることのこの活動の魅力ではないか、そう感じさせるようなピザ窯作りでした。貴重な体験をさせていただく機会を与えていただきありがとうございました。」

○鳥取大学地域学部　３年生（ＤＩＹグループボランティア）

「実際に生徒の皆さんと活動を行ってみて、生徒の皆さんの器用さ、行動の速さに驚きました。先生方やボランティアの学生の中では「この活動はできるんだろうか。」といったことや、「この活動は難しいかもしれない。」という疑問や不安はありましたが、そんな不安は一切心配することではなく、生徒の皆さんは難しい説明をちゃんと聞いて、てきぱき行動しておられ、その日のノルマとしていた作業がすぐ終わってしまうということもあり、そのような姿が印象に残っています。（中略）

この活動は「余暇の充実」というのがテーマだったそうですが、生徒の皆さんが、できる範囲の中で余暇の充実に努力されているのが分かりました。」

○鳥取大学地域学部　４年生（ＤＩＹグループボランティア）

「普段できないことを友人たちと協力しながら取り組むことができたことは子どもたちにとって良い経験になったと思います。完成したピザ窯を目にすることで、ものづくりの達成感やよさを感じられたと思います。ただ、やはり工具を使った活動などは危ないなと思うこともありました。大人の目を必ず必要とする活動と自分の力だけでもできる活動があるとして、目的に応じて学校の授業ではどう活動を選択するのかが難しいところのように思いました。」

教師とは違った視点から生徒たち、授業を捉えた貴重な意見もあり、今後の参考にしたい。また、「自分自身が成長できた。」など、大学生自身が自分と向き合い、成長していく様子が見られた。ともに活動していくなかで、ともに成長していく相互作用があることが分かった。

５　今後の展望

生涯学習を推進するようなサークルや障害者スポーツなどの社会資源があっても、そこへ向かう気持ちが育っていないと生涯学習へ移行することはできない。学校教育の中でできることは「やったことがある。」「やってみたらできた。」という経験を重ね、卒業後に友達に誘われた、○○教室が近所にできるなど、チャンスが来た時に「やってみようかな。」と一歩踏み出せるような気持ちを育てておきたい。

また、その活動をしたことがあっても、実際にジムやサークルに入会する時どうしたらいいのかが、分からないことが多いと聞く。また、どうやって情報を得ればいいのか、どこに問い合わせればいいのかを知らないことも多い。生活単元学習で鳥取市布勢にある県立体育館のジムへ行き、スタッフの人に手続きの仕方を聞いたり、実際に利用してみる学習を行ったりしたこともある。また、スポーツの好きな生徒が卓球教室を紹介されて卒業後も楽しんでいる姿もあった。学校だけで終わらず、社会へどうやってつなげていくかが次の課題となる。

学習内容としては、その時代の生徒集団のニーズに合わせた余暇活動と、長い時間培われた芸術、文化を味わう教養的余暇を学習活動の中で展開させ、障害者の生き甲斐づくりにつなげていきたいと考えている。

６　まとめ

本研究では、鳥取大学附属特別支援学校高等部本科において「余暇の拡がり」を目的とした授業実践と事例研究を通して、青年期に相応しい活動、生涯を通して豊かに生活できる教育内容の検討、分析を行った。

高等部段階になると「もう高等部だから。」「もうすぐ社会にでるから。」と働くための学習に重点をおきがちである。生活年齢に合わせた「働く力（社会参加する力）」も育みつつ、同じように「生活する力」「楽しむ力」を充実させていくことが大切であると考えた。今回は特に「楽しむ力」に焦点を当てた。

余暇活動は正解のない活動であり、評価されることを目的としていない。事例研究では、自分を表現できない、「したい。」という気持ちに乏しい、自己肯定感が低い生

徒２名を余暇活動の実践とともに追っていった。自分で選択した余暇活動に仲間とともに打ち込むことのできた経験が、自己肯定感が低く、日常生活の中で投げやりになることが事例対象生徒の内面を大きく成長させることが分かった。試行錯誤し、興味関心が同じ仲間の中で多様な価値観に触れ、自分を表現することの楽しさを味わった経験は、自分自身への信頼、誇りを高めることになり、自分の可能性を信じて卒業後も豊かに生活できると思われる。

また事例生徒Ｂは親子懇談の時、「働かんと余暇ができんからなー。」と将来の就労へも意欲を見せた。２年生までは「地元（町内）で就職してほしい。」という保護者に願いもあり、福祉作業所で現場実習を行っていたが、３年生になると「うまくできるか分からないけど、一般就労したい。がんばりたい。」と保護者を説得し、一般企業での実習を行い高評価を得ることができた。また、「（活動が終わらず）残業してから、働くって楽しいと思った。」という生徒もいたように、「楽しむ力」が充実することで、自分の将来へ明るい展望を持ちながら生活している姿が見られる。大げさかもしれないが、「この世界には楽しいものがたくさんある。」と知っていることは、どのような時代を迎えてもたくましく生きる支えとなると思われる。

引用文献

1　J.デュマズディエ（1972）,『余暇文明へ向かって』東京創元社　p.17.84.245.

2　今和次郎（1951），『家政読本』，岩崎書店　p.45

参考文献

・鳥取大学教育地域科学部附属養護学校（2002）,『「生活を楽しむ」授業づくり―QOLの理念で取り組む養護学校の実践―』,入江克己・渡部昭男監修,明治図書

・鳥取大学附属養護学校（2005）,『「自分づくり」を支援する学校』,渡部昭男・寺川志奈子監修,明治図書

・鳥取大学附属特別支援学校（1995-2018）,『研究紀要第15集』-『研究紀要　第34集』

・鳥取大学附属特別支援学校著,三木裕和監修（2017）,『七転び八起きの「自分づくり」』,今井出版

・白石正久（1994・1996）,『発達の扉　上・下』,かもがわ出版

・白石正久・白石恵理子編（2009）,『教育と保育のための発達診断』,全障研出版部

・白石恵理子（2018）,『知的障害のある人の成人期における「４歳の節」』,全国障害者問題研究会編『障害者問題研究』pp.106-113,全障研出版部

・渡部昭男（2009）,『障がい青年の自分づくり～青年期教育と二重の移行支援～』,日本標準

・別所哲（2009）,『自閉症者の発達と生活』,全障研出版部

・丸山啓史（2016）,『私たちと発達保障』,全障研出版部

・三木裕和・きぬがさ福祉会・ひびき福祉会（2019）,『はたらく　ＷＯＲＫ　障害のある人の働く姿から』,きょうされん

本論考は科学研究費助成事業（奨励研究）課題番号１９Ｈ０００５０「知的障害者の生涯学習の充実させるための特別支援学校高等部の教育研究」をもとに執筆した。